

第6回レフェリーアカデミー報告書

福岡県ハンドボール協会所属 荒木隆史

【1】ジュニアリーグを担当して

私は今回の第6回レフェリーアカデミーで、JHL ジュニアリーグ男子決勝戦の北陸電力ジュニアブルーロケッツ対琉球コラソジュニアの試合を担当させて頂いたが、この試合のレフェリーを担当する中で課題に感じたポイントが2つあった。

1つ目はどこまでアドバンテージを見るべきかということである。私が小学生の試合を担当したのは、今回の JHL ジュニアリーグ男子決勝戦が初めてであり、この試合を担当する前日からペアレフェリーである梶原氏（福岡県ハンドボール協会所属）と過去の小学生の試合の動画を何度も見返し、お互いに基準を確認してこの試合に臨んだが、動画で見る試合と実際にコートに立って見る試合は全く異なり、どこまでアドバンテージを見るかという基準を、30分の試合の中でお互いに早い段階から確立することが出来ていなかったことが、今回の試合で私が感じている大きな課題である。

2つ目はどのように選手・ベンチに伝えるべきかということである。小学生の試合には、Jクイックハンドボールのルールが適用されており、中学校・高校、それ以上のカテゴリで適用されているルールとは少し異なり、スローオフもセンターラインで行われるのではなく、Jクイックハンドボールではゴールイン直後、ゴールエリア内で行われるのである。

そのため、いつもの試合であれば攻撃側選手を側方から巻きつけて離さなかった防御側選手などに対して、ゴールインの笛の後、その危険なプレーを注意しに行く時間があるが、Jクイックハンドボールでは、ゴールイン直後すぐにスローオフが行われ、次の攻撃の展開に進むため、選手たちの中に介入してインフォメーションを伝える時間がないのである。つまり小学生のハンドボール、Jクイックハンドボールはレフェリーが試合を止める笛を吹かない限り試合が止まることは無いのである。

このことから、ベンチのチーム役員がレフェリーの判定に対して疑問を持ち、レフェリーにアクションを求めているとしても、試合の展開がとめどなく進むため、レフェリーがベンチに伝えに行く時間がないので、ベンチサイドが納得いかないまま試合が進んでしまうという事が今回の試合で何度かあった。これも私が今回の試合を通して感じた大きな課題である。

以上2つの課題について述べてきたが、小学生の試合を担当する以上、レフェリーは選手に怪我をさせない事、ルールを正確に選手に伝える事を特に意識して試合に臨まなければならない、それは小学生カテゴリでプレーしている選手たちが将来日本ハンドボールを牽引する選手たちになる可能性を秘めているからである。そのため、今回のような非常に大きな試合を担当させて頂いたことに誇りを持って、今回出た課題を克服しながら、これからも精進して参ろうと思う。

【2】プレーオフを観戦して

私は今回のプレーオフ計4試合を観戦し、その試合を担当していたレフェリーを見て、一番に感じたことは、判定の正確さや手際の良さよりも、選手に伝えることの上手さであった。つまり、インフォメーション・ボディーランゲージが非常に明確で説得力があったのである。

このインフォメーション・ボディーランゲージは、第5回レフェリーアカデミー（第10回チャレンジディビジョン順位決定戦を舞台とした）での主なテーマであり、この大会で私が担当した毎回の試合前に、講師の方からこのインフォメーション・ボディーランゲージを120%発揮するというアドバイスを受けていたが、インフォメーション・ボディーランゲージを120%発揮するという事がどれほどのものなのかという事が、今回のプレーオフを観戦して私の中で明らかになった。それと同時に、ハンドボールの試合のレフェリーをする中で、このインフォメーション・ボディーランゲージが試合を円滑に進めるために如何に重要であるかという事も理解することが出来た。

これまで、インフォメーション・ボディーランゲージについて述べてきたが、次にトップレフェリーの判定の正確さについて述べていこうと思う。

今回のプレーオフを担当していたレフェリーの判定は非常に正確であった。それは位置取りが良く常にプレーが見やすい位置に位置取りをし、判定をしていたからである。またペア同士での領域分担、基準が明確であるため、普段私がレフェリーとして担当している試合で良く起こる判定の差し違えが全くなかったのである。

また今回のプレーオフを担当していたレフェリーは、それぞれのチームの攻め方や守り方などのチームカラーをよく理解しているように見えた。

例を挙げると、今回のプレーオフの女子2ndステージ（第2日目）オムロン対広島メイプルレッズの試合で、広島メイプルレッズの攻撃側選手がオムロンの防御側選手の正面から接触したプレーに対してレフェリーは、7mスローの判定（ゴールエリアへの侵入）をしていたが、観客席からではそのプレーは防御側選手が明らかに正面から攻撃側選手と接触していたため、オフenseivフール（チャージング）のように見えた。しかし、その後第6回レフェリーアカデミーで講師として来られていた先生からそのプレーに対しての解説を受けたが、オムロンは伝統的にゴールエリアライン内を上手に利用して守るチームであるため、このことを知っていないと誤ってオフenseivフールの判定を下してしまう、と仰っていた。

このように、時には自分が担当する試合のチームのチームカラーも頭に入れておかないと、誤った判定を下してしまう恐れがあるという事も今回のプレーオフ観戦で理解することが出来た。

以上、プレーオフを観戦して私が感じたことについて述べてきたが、これらの要素はどれも日々実践を積み、ハンドボールの研究をしていないと身に付かないものである。将来的には自分もこのプレーオフのステージに立つという事を想定しながら、これからも研究を続けていかなければならない。

【3】1年間の学びについて

私は全5回（今年度は特別に第6回を追加）からなるレフェリーアカデミーのプログラムに、年度途中である第3回から参加させて頂き、先日行われた第6回レフェリーアカデミーを終えたことで、2年間活動があるうちの1年目が終了したことになるが、この1年間を通して私はレフェリーとしての技術的・精神的要素で大きく成長することが出来たと実感している。

私がこのレフェリーアカデミーに第3回から参加させて頂いた当時、私はまだD級であった為、レフェリーアカデミーに参加するまでは県内の大会でしかレフェリーをする機会が無かったので、初めて第3回レフェリーアカデミーでクラブチームカップを舞台として、全国大会のレフェリーを経験させて頂いたときはかなり緊張してしまい、頭が真っ白になっていたことを今でも覚えている。またサニックスカップを舞台とした第4回レフェリーアカデミー、チャレンジディビジョン順位決定戦を舞台とした第5回レフェリーアカデミーではどちらの大会も、全国の強豪チームが集う、自分がかつてレフェリーとして経験したことが無い大会であるため、これまでにないベンチや観客からの煽りや暴言を受け、何度も自信を欠いてしまい、折れそうになった時もあるが、それでも1年間レフェリーアカデミーでレフェリーを続けることが出来たのは、レフェリーアカデミーの講師の方々の熱心な指導のお陰であると1年間を振り返って特に感じている。

先日の第6回レフェリーアカデミーを終えたことで、2年間活動があるうちの1年目が終了し、私にはあと1年しか残されていないことになるが、この残りの1年でA級にまでレフェリング技術を上げるためには、自身のスキルを更に磨かなければならない。1年目ではレフェリーとしての基本的な技術について学んできたが、来年度からは、レフェリーとしての基本的な技術である、手際が良い、競技規則通りの美しいジェスチャーが出来る、判定が正確にできる等のことだけでは無く、イエローカード・レッドカード・ブルーカードをレフェリーウェアのどこに収めるか等、細かなところにも気を配るようにし、常に自分が色々な人から見られているという事を意識するようにならなければならない。

最後になるが、これはレフェリーアカデミーに講師として来られている先生方が口を揃えて仰っていることだが、アカデミー生として特に大事なことは、自分の地元でしっかりと貢献するという事である。この貢献するとは、ただ自分の地元の試合に顔を出し、レフェリーアカデミーのプログラムを経験したことで鼻高々になりながらレフェリーをするのではなく、まだD級であった頃の謙虚な気持ちを持ちながら、自分が地元の大会でレフェリーをさせて頂いているという思いでレフェリーをすることで、時には目上のレフェリーの方々のお話に耳を傾け、地元でも学ぶ姿勢を怠らないということである。これら、地元で貢献する活動を通して初めてトップレフェリーへの道は開けるのではないかと私は思う。

これからも、地元の協会に貢献するという事を忘れず、残りの1年間のレフェリーアカデミーの活動期間を有意義に過ごし、将来的には日本ハンドボール協会の第一線で活躍することが出来るような人材になれるよう、これからも精進して参ろうと思う。